中小企業金融研究会シリーズ　II

金融構造の変化と中小企業金融

中小企業金融研究会　監修
全国信用金庫協会　編集

日本経済評論社

発刊にあたって

全国信用金庫協会
会 長 小 原 鉄五郎

わが国経済は，昭和46年８月のいわゆるドルショック以降，急激な変貌を遂げている。生産第一主義に支えられた高度成長経済は外にあっては円に対する海外からの圧力，内にあっては急進するインフレ傾向等にもみられるように，行き詰まりが表面化するとともに，金融環境もそれにともなって一変した。

特に金融市場はドルショック以降，大量のドル流入が外為会計の大幅支払超を招来し過剰流動性を異常なまでに増大させたことが45年来の日本経済の長期的不況と相まって，かって経験したことのない金融の超緩慢をもたらした。しかも，この金融緩和は企業の需結ギップの拡大ならびに国際収支の黒字定着による外為会計を通ずる現金通貨供給の定着等を背景としているだけに，基調的なものとして受け止められている。

またこれにともなって，資金の流れも変化し法人部門の資金不足が縮小し，替って公共部門，個人部門の資金需要が強まる傾向にある。

このようなマネーフロー，金融構造の変化に対して，及びそれらが金融機関経営にどのような影響を及ぼすか，また金融機関がどう対処するかについて，各方面で，さまざまな論議が展開された。

全信協では46年10月に，金融二法制定前後から46年３月頃迄に，中小企業金融研究会（代表　川口弘中央大学教授）のメンバーの方達が発表された論文を単行本に編集し『金融効率化と中小企業金融』として日本経済評論社より発刊した。

今回続いて，中小企業金融研究会シリーズⅡとして，前述のような情勢変化のもとで問題視されているマネーフロー，金融構造の変化，ならびにその中での中小金融機関経営のあり方にテーマを絞り『金融構造の変化と中小企業金融』として発行することにした。収録されている諸論文は，中小企業金融研究会の

先生方がこの1，2年における金融環境の激変のさ中に発表されたもので，いずれも大変意義のある力作ばかりである。

時あたかも信用金庫業界は，48年度より躍進第二次3ヵ年計画を実施することにしており，その路線に基づく正しい経営のあり方の面で参考とするところが多いものと自負している。

関係各位のご熟読を期待してやまない。

（昭和48年1月22日　記）

序

本書は，われわれ「中小企業金融研究会」のメンバーが，71年８月―73年１月の間に（70年８月の１篇を除く）いろいろな機会に発表して来た金融関係の論稿のうちから，主としてドルショック以後の金融構造変化と中小企業金融乃至は中小企業金融機関との関連を取り扱った21編を選んで一書に纒めたものである。このシリーズの第１回として71年に公刊した「金融効率化と中小企業金融」（上・下）は，日本経済がようやく「先進国」段階に到達しようとする時点で，主に国内的要因から生じた金融構造変化のなかの中小企業金融問題をめぐる論稿を集めたものであったが，今回の諸論稿は，国際収支大幅黒字定着による「金融超緩慢」のなかでの中小企業金融問題に多面的な接近を試みたものである。国際通貨不安を背景とする，いわば「国際的」要因から促されて，前の期間に進展を開始した金融構造変化が決定的な段階を画することになったこの時期は，中小企業金融機関にとっては，かつて経験したことのない試練の出発点であった。この試練をどのように乗りきるかが，おそらく中小企業金融機関の将来を決定することになるだろう。

この問題についてわれわれの間に，必ずしも見解の一致があるわけではない。自由に各自の観点から論じているに過ぎないが，それだけに，読者がいろいろな視点から問題に取り組むうえで，多様な手がかりを提供する役に立てば幸いである。

この機会に，われわれの自由な研究会活動に温い支持を与えて下さった全国信用金庫協会のみなさんに心からお礼を申し上げたい。また，各論文の旧掲載誌が，こうした形での再録出版を快諾されたことについても深く謝意を表します。

1973年２月17日

中小企業金融研究会

川　口　　弘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

本書成立の経緯ならびにその意義については，小原会長と川口代表の二つの文章によって明らかでありますので，ここでは全体の構成と読みかたについて些か申し述べることにいたします。

本書は，まず第1篇で金融構造の変化を扱います。ここには，あくまでも信用金庫とその顧客である中小企業がイメージの中心にあるのですが，これらを包み込む金融環境がどう変ったのか，その効果はなにか，その原因はどこにあるかといったことを論ずる文章を蒐めてあります。影響の受け手（個々の金融機関や顧客）の反応には原則として及びませんので，ご注意下さい。いいかえれば，ここでは個々の主体にとっては所与の条件とされるものがまず呈示されるのです。

次の第2篇では，主体性をもって行動しうるものとしての中小企業金融機関（なかんづく信用金庫）の当面する諸問題が扱われます。ここでは，信用金庫は自分で自分の行動が決定できるものとされているので，しばしば具体的かつ現実的な対応策や考えかたが，たとえ熟してはいなくてもヒントとして，鏤められています。

第3篇は，中小企業構造の変化を扱います。すなわち，信用金庫の客筋はどんなものか，これに応接し，満足してもらい，かつ信用金庫自体も繁栄するには，いかなる諸点に注目すべきか，そうした諸点はどんな歴史と伝統を担っているかなどを論ずる諸篇が列べられています。

かく整然と列べてあるような言いぶりを致しましたものの，どうしてこういう形に排列しなければ納まらないのかという疑問に答えるのに十分な用意を，じつは予めしてあるわけではないのです。かりに親愛なる読者が，私ならこう列べると提案されたら，全部ではないがある程度は受け入れられただろうと思います。そうしたご提案なり，ご教示を得ることは私どもには大変勉強になる

ことですので，ぜひ出版社気付でお便りを下さいますようお願いいたします。

さて，各篇のはじめには，その篇の校正を読んだとき，読者諸氏がこういうことを予めご承知になっていたら読み良いだろうと私が感じたことを書きました。また各篇のおわりには，ご執筆の諸先生に失礼にわたることもあったかと思いますが，校正通読によってここがアナだとか，こう考えを進めれば面白くなりそうだとか感じたことをあえて〈率直〉に記しました。

読み方を指導するほどエラクはないのですが，こういう読み方をする者があるということ，つまり読者は自由にこの本のなかで動きまわれるのであって，単に諸先生のご高説を拝聴しただけではこの本の値打は半分も出ないのだということを解ってもらいたかったのでやってみたままです。これについてもご意見寄せられるよう切望いたします。

昭和48年3月5日

堀家文吉郎

目　　次

発刊にあたって ……小原鉄五郎…(1)
序 ……川口　　弘…(3)
はじめに……堀家文吉郎…(5)

第1篇　金融構造の変化

■第1篇へのご案内……(13)

1　金融構造変化の長期展望 ……川口　　弘…(15)
1　経済構造の変化と過剰流動性経済 (15)
2　寡占状況及び生産需要補完金融の進行と借手の同質化 (17)
3　金融政策問題の展望 (22)

2　金利自由化をどう進めるか……吉野　昌甫…(30)
1　預金金利自由化論の背景 (30)
2　貸出金利自由化の現状 (31)
3　進展しない預金金利の自由化 (34)
4　預金金利引下げの条件 (38)

3　金融構造の変化と中小企業金融 ……高田　　博…(41)
1　基礎構造の変化と中小企業 (45)
2　金融構造の変化 (56)

4　低金利政策の意味するもの……森　　静朗…(71)
1　日本の経済構造の変化 (71)
2　金融構造の変化 (74)

3　低金利政策の意味するもの（76）
4　低金利の問題点（78）
5　低金利政策下の中小企業（81）

5　預金金利の引下げをめぐる諸問題 ……山下　邦男…(83)
1　最近の金融環境の変化と金融構造（83）
2　預金金利引下げ問題の視点（86）
3　預金者における預金金利引下げの影響（88）
4　預金金利引下げと企業経営（91）
5　中小金融機関への影響（93）
6　消費者金融の増大と中小金融機関の経営特質（95）
■第1篇のまとめ ……(99)

第2篇　中小企業金融機関の課題

■第2篇へのご案内……(101)
1　20兆円信用金庫建設の課題…… 川口　弘…(103)
1　金融二法と信用金庫（103）
2　業態同質化の進行（105）
3　経営特性と貸出金額の大口化（109）

2　住宅金融の発展と中小金融機関 …… 川口　弘…(113)
1　変貌する金融市場と適合性の発揮（113）
2　欧米における住宅金融の実態（115）
3　個人住宅金融の担当専門機関（117）

3　20兆円信用金庫建設の課題…… 堀家文吉郎…(120)
1　10兆円達成の経過と特徴（120）
2　20兆円達成への予測（122）

3　環境の差異がおよぼす影響（123）
4　こんごの信金発展の課題（125）
5　会員意識の一層の高揚を（127）

4　金融効率化行政の進行と信用金庫……吉野　昌甫…（130）
1　預金金利の自由化（130）
2　対応していくための二つの視点（132）
3　会員組織と金融効率化との関連（139）

5　相銀，信金，信組の異質性の探求……高田　博…（143）
1　金融機関と取引先企業の「規模の対応原則」と異質性の基準（143）
2　金融機関の同質化傾向と「規模の対応原則」（151）
3　異質性の歴史的形成と金融行政の作用（155）

6　金融機関の地域性について……森　静朗…（158）
1　相銀，信金の発展（159）
2　相互銀行の変質（162）
3　相互銀行発展の問題点（164）
4　中小企業をめぐる問題点（167）
5　相互銀行経営の特性と歯止め（169）

7　信用金庫の合併に関する覚え書き……山下　邦男…（173）
1　中小金融機関の合併のねらいと都市銀行の合併のねらいの相違（173）
2　金融機関の同質化と合併問題（176）
3　地域経済との密着化と信金合併（179）

8　金融効率化論と中小金融機関　……笹原　昭五…（182）
1　金融効率化論の性格（182）
2　スケール・メリット論の再吟味（184）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3　合併推奨論の再吟味（187）
4　中小金融機関の課題（189）

9　20兆円信用金庫建設の課題 ……清成　忠男…(192)
1　10兆円達成の評価（192）
2　経済環境の展望（198）
3　こんごの信金の課題（200）
4　課題達成のための方法（201）
■第2篇のまとめ……（203）

第3篇　中小企業構造の変化

■第3篇へのご案内……（205）
1　中小企業金融論 …… 堀家文吉郎…(207)
1　中小企業問題への基本的視点（207）
2　中小企業の資金需要（216）
3　中小企業への資金供給（231）

2　高成長中小企業の経営規模拡大と主取引き金融機関との関係 …… 吉野　昌甫(251)
1　高成長中小企業の成長性分析（251）
2　高成長中小企業の財務分析（254）
3　一社平均の成長分析（257）
4　取引き金融機関の利用順位（259）
5　金融機関依存度（261）
6　都市銀行への業種別借入れ依存度（264）
7　業種別長期資金平均依存度（267）

3　借手ならびに預金者としての小零細企業 …高田　博…(278)
1　零細企業の本質（279）

2　小零細企業の動向と若干の問題点（281）
3　借手としての小零細企業（286）
4　預金者としての小零細企業（289）

4　中小企業金融問題の考え方 ……森　　静朗…（292）
1　庶民金融と庶民金融機関（292）
2　中小商工業金融問題をめぐる負担（295）
3　中小企業の発展と中小企業金融（298）
4　経済構造と中小企業をめぐる論義（300）

5　中小企業金融の展開……山下　邦男…（304）
1　中小企業問題の展望（305）
2　企業サイドからみた中小企業金融（307）
3　金融機関サイドからみた中小企業金融（311）
4　中小企業の政策金融について（315）

6　中小企業の構造はどう変わるか …… 清成　忠男…（317）
1　産業構造変化の新展開（317）
2　産業発展のパターンは変わった（320）
3　中小企業はどう変わっていくか（321）
4　中小企業の成長分野（322）
5　中小企業の衰退分野（325）
6　金融機関の取組みは困難化する（326）

7　ベンチャー・ビジネスの諸問題 …… 清成　忠男…（327）
1　ベンチャー・ビジネスとは（327）
2　ベンチャー・ビジネスの特徴（328）
3　ベンチャー・ビジネスの発生の背景（329）
4　ベンチャー・キャピタルの発生（331）

5　問題点と今後の展開（332）
（付記）　**高田教授の批判にこたえて**……（335）
■**第３篇のまとめ**……（337）
著者紹介 ……（339）

第1篇　金融構造の変化

第1篇へのご案内

コメンテイター　堀家　文吉郎

この篇の中心の話題は，昨年行われた預金金利の引下げだ，といって良いでしょう。高田氏のものを除いた他の4篇が，すべてこれを扱っているからです。ですから，もちろんこの順序で読んで下さっても良いのですが，私としては4→5→1→2→3という順序の読みかたを推薦します。（かりにこの順序に従うと，……）

まず森氏が，オーバーローンの解消→低金利→金融機関の利鞘縮小という，ここ2年ほどの環境変化から低金利時代の到来を告げ，預貸両サイドからこれを論じ，前者については<批判>を，後者については<特色>を述べ，次にこれが中小企業の側にどうハネ返っているか，を書いてシメ括っています。

山下氏は，国際収支黒字の定着という現象を重視しながら，これが金融機関の資金供給能力の増加に繋がると言い，随伴して起る（貸出金利の低下から要請される）預金金利の引下げで誰がトクをするかという点を，個人・企業・金融機関それぞれへの影響を考えて検討しています。ドコがトクをするでしょうか（本文を読んで下さい）。

川口氏の場合は，国際収支黒字も考慮しますが，それよりも国内における協調寡占化の要因を重視し，生産物需要補完金融時代が来たと言い，それに伴って生ずる諸現象を記した後に，しかし金利の（自由化ではなくて）弾力化，ことに預金金利の弾力化には多くの障害がある，その原因は何かというように進みます。

吉野氏は，金利と公定歩合の連動性（つまり，一種の弾力性の考えかた）という観点から現象を捉え，預金金利の引下げ（貸出金利の引下げも）がなぜ難かしいか，どうすれば（あるいはどういう条件が揃えば）利ザヤの縮小から金融機関は免かれ得るかを論じます。ポイントは，黒字部門（個人部門）の黒字縮小にあるように思いますが，どうでしょうか。

高田氏の論文は，産業構造の変化から接近していきます。戦後の成長は投資財部門に過剰生産力を蓄積し，需要不足はＧＮＰの10％に達した。このギャップを埋めるため金融構造（というより金融の仕振り）が変ってくるだろう。資金需要の性質も融資構造も変化する。中小企業金融のありかたも従前とは違ってくる，と言います。

ですから，読者としては比較的に現象面に密着したところから始まって，産業の再編成の意味に終る道順を一まわりするのです。筆者は異っても，内容は違っても，適宜話柄がオーバーラップしていますから，断絶を感じませんし，気がついたら生産物需要補完金融の必要を考えさせられていることになりましょう。まあお試し下さい。では，……。

1. 金融構造変化の長期展望

川　口　　弘

1.　経済構造の変化と過剰流動性経済

ドルショック以降の，いわゆる金融超緩慢のなかで，長期的不況の様相を濃くしていた日本経済は，この秋以降急速に立ち直りを示しはじめ，８月以来の卸売物価の急上昇によって，一転してインフレ悪性化を憂えられるようになった。

かつて65年～66年のいわゆる構造的不況が，67年以降急速に回復して，３年にわたる急成長を展開するにいたったことを想起させるものがある。日本経済に潜在する驚くべき成長エネルギーは，つねに多くのエコノミストの予想を超えて噴出し続けて来たのであるから，ここに来て景気の予想外の急進展が生じたとしても敢えて異とするには足りないであろう。しかし，短期的な循環現象がどう展開するかにかかわりなく，日本経済のいろいろな分野で，一定の長期的な構造変化が徐々に進行しており，景気の一波動ごとに漸次表面化しつつあることを見落すわけにはいかないようである。同時に，世界経済もまた大きな転換を示しつつあって，日本経済の世界市場における位置づけも，1960年代とは全く段階を異にするにいたったといってよい。

世界経済の構造変化の中心は，第２次大戦後，ＩＭＦ体制を通じてドルをばらまきながら圧倒的優位を占め続けて来たアメリカ経済の座が大きく揺らぎ始め，ＥＣと日本がこれと対等の地位に近づいて，社会主義圏市場の拡大とともに世界経済の多極化が大きく進展したということであり，ＩＭＦ体制の事実上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com